陸自、横田のC-130から空挺降下訓練

Green light, Go: JGSDF conduct jump training from Yokota C-130's

July 17, 2020

By Staff Sgt Gabrielle Spalding
374th Airlift Wing Public Affairs

百里基地発ー横田基地第374空輸航空団と陸上自衛隊第1空挺団の隊員が7月8日及び9日の2日間、王城寺原演習場で空挺降下訓練を実施した。

「二国間訓練は、我々の戦闘能力を向上する上で重要だ。互いを理解し合うほど、相互運用性が高まり、チームとして戦うことができる」と第374運用群副官兼二国間空挺降下訓練任務指揮官ニック・ボナー大尉は述べた。

同訓練では、およそ120人の陸上自衛隊空挺隊員が、20人以上の「生存・回避・抵抗・脱出（SERE）」専門官やC-130Jスーパーハーキュリーズの操縦士、ロードマスター、ジャンプマスターと訓練を行った。

今回のミッションで重点が置かれたのは、空挺隊員の資格の維持、人員投下、コミュニケーション、ホスト国の調整、口頭による降下手順だ。

「VIRSは、陸上自衛隊で使われる空挺降下方式だ。これはパイロットが航空機のナビゲーションを使って空挺降下地点を目指す代わりに、地上の管制官がナビゲーションを務め、左または右に操縦するよう指示し、『降下、降下、降下』と指令を出し空挺隊員に降下できるタイミングを知らせる方法だ」

C-130が最高高度に達すると、貨物室のサイドドアが開き、陸上自衛隊空挺隊員がジャンプする態勢が整う。仲間の声を聞いたり、口頭でコミュニケーションを図るのはもはや不可能になり、そうした時こそ、手信号が重要となる。

「手信号は空挺隊員と搭乗員が正しく疎通を図っていることを確かめるために不可欠であり、適切な降下のタイミングと実行を可能にする。今回の訓練では、空挺隊員、ロードマスター、ジャンプマスターのあいだで同様の信号を確立することも行った」と第36空輸中隊ロードマスターのバーニー・バーネット技能軍曹は述べた。

天候、言葉の壁、新型コロナウィルス感染症の予防措置など、一連の訓練で特有の課題に直面しながらも、参加者はそれらを共に克服し目的を達成した。

「全てのミッションは100％成功した。陸上自衛隊の空挺隊員と接すると、我々と同じ戦士であることが分かる。彼らは空挺降下の任務に意欲を持ち、実践を望んでいる。そして成功を望み、我々との相互運用に期待を抱いている。それを見て、新鮮な気持ちだった」とボナー大尉は訓練を振り返った。